

西之表市の面踊

【所在地】西之表市住吉深川（面踊保存会）

【種別】県指定無形民俗文化財

【指定年月日】昭和 46 年 5 月 31 日



面踊と太鼓（前夜）

種子島には古くから「面かぶり」の踊りがあったが、江戸時代の中ごろ伝来してきた、「ひょうたん踊」（腰にひょうたんをぶらさげて踊る踊り）と太鼓踊りが一つになって独特の「面踊」ができたと伝えられている。

踊り手は、自分のかぶる面と似あう野良着で腰にひょうたんを下げた者が 20 人、ハットクとモモヒキを着た道化役の猿 2 人、入れ鼓 4 人、鉦 4 人、太鼓 7 人からなる。踊りはこっけいさのなかにもどこか哀調を帯びている。

この系統の太鼓踊りは島内各地に見られるが、面をかぶった踊り手が登場するのは、ここだけである。面は自家製のもので、泥で型を作り、その上に紙を 20 枚位貼って充分乾かしてから、泥型をこわして落とし、墨や絵の具でクマドリして仕上げる。

歌詞は、江戸初期のものであるが、室町期の芸能の影響をうけていると考えられている。